



身近な自然



No.11
秋号



9月のビオトープ交流会観察会 「扇状地の湧水地と水辺の保全活動」

水が湧くということのありがたさ、清流のすばらしさを実感した一日でした。9月24日（日）におこなわれた旧美川町の安産川（やすまるかわ）の観察会では、トミヨ（はりんこ）の生息地である川の生息活動へ参加し、継続的に活動を続ける、地元の方々とのふれあい、また、地域の自然を守る活動団体である、はりんこ塾と美川自然人クラブのみなさまのお話を聞くことができました。

今回参加した安産川の清掃活動は、むかしから水田の維持管理とともに続けられてきたものです。農業が衰退し、人の手による水管理ができなくなっている場所が各地でたくさん見られますが、ここでは、湧水のシンボルである「はりんこ」を守るという地元の方々の思いが、すばらしい継続的な活動を支えています。

朝7時前から約1時間、川に数十人の方が入って、水辺や川の中に生い茂っている草を川から上げました。またこの日は運動会で子どもたちが来ていませんでしたが、いつもは草と一緒に引き上げられた「はりんこ」を探して、川に戻すということもやっています。交流会のわたしたちも「はりんこ」探しを手伝いました。またオオカナダモを川から引き上げました。骨折して清掃活動に参加できなかった当会事務局長も、子どもの代わりに水草の中から「はりんこ」を探す作業をおこないました。

清掃活動の後には、美川自然人クラブの方に、他の保全活動をおこなっている場所に案内していただきました。湧き水の出ている場所や、むかしから使われている協同の洗濯場なども見せていただきました。清浄な川や洗濯場がいまもなお残り、地元の方々が大切にしていることがわかりました。



いしかわビオトープ交流会2006年シンポジウムは、総会日程にあわせ6月3日(土)に金沢大学「角間の里」2Fホールにおいて約30名の参加でおこなわれました。

今回のいしかわビオトープ交流会シンポジウムでは、身近な自然環境の保全に取り組んでいる市民を中心とした活動に焦点を当て、県内で活動する団体や個人より活動報告していただきました。今回のシンポジウムでは、パネリストとなった各団体・個人、また参加者が、それぞれの地域の取り組みの目的や展望、問題点等を共有することができ、地域を越えた広い交流のなかで、地域の自然を守る上での住民の役割を再確認することができました。以下に、各パネリストの発言をダイジェストでお伝えいたします(当日のビデオテープから起こしたもので文責は編集部にあります)。

< 都市住民による里山活用の事例

～ 角間里山メイトの活動 >

市原唯男 氏(角間の里山メイト代表)

「角間の里山メイトの活動：現状と展望」

「角間の里山メイト」は「角間の里山自然学校」ができたときに、ボランティアグループとして生まれた。角間のいろいろなゾーンを大学から借りてさまざまな活動をおこなっているが、全体として里山の保全に繋がる活動に取り組んでいる。



写真：北谷の復元された棚田

北谷では10年以上前に放置された棚田を復元し、無農薬農業による稲作をおこなっている。その他、竹林の整備や自然観察会、藍染めの取り組み、里山でとれる素材を活用した物づくりなどをおこなっている。「角間の里」の前にできた畑では、低農薬の野菜を作っている。角間の里山全体を里山メイトの活動で保全していくには、まだまだ数が足りないが、何もしなければ角間は竹林だけになってしまうのは明らかであり、持続的に人の手を加える必要がある。今後、里山メイトの数を増やしていきたい。とくに団塊の世代のパワーに期待している。

青木国弘 氏(角間の里山メイト「棚田復元グループ」)

「北谷の棚田復元計画」

北谷は20枚の田んぼと11の池がある。先週は小学生も参加して100人で田植えをおこなった。子どもたちは、はじめて泥に入り稲を植えるという体験の場となった。

この北谷は、大学の移転先として25年前に県が買収した土地であり、その後棚田は放置された。4年前に私たちが手作業で草を刈り、鍬で開墾した。現在は何とか形となり落ち着いてきた。池にはモリアオガエルが産卵しトノサマガエルも来ている。農薬を使っていないため、生き物のあふれるビオトープの実践ともなっている。

50年前の角間の航空写真を見ると、谷地に

は田んぼがありまわりを森に囲まれて、ため池もあり豊かな自然にあふれていた。こうした姿を一部でも復元しようと4年前に3人で開墾をはじめた。現在の姿をみると我ながら良くやったと思える。昨年は、金大と龍谷大、京都女子大との共同で北谷の生態研究がおこなわれ、田上小学校のこどもたちによる稲刈りと足踏み脱穀機などを使った作業、餅つきなどをおこなった。

私は、毎日午前中に北谷にいて水田の水の管理などをおこなっているが、自然の中で良い空気を吸い、鳥の声を聞きながら楽しくやっている。「人をしあわせにする里山づくり」をモットーに今後も取り組んでいきたい。

高島 暁 氏(角間の里山メイト「竹ん子クラブ」)
「角間における竹林整備」

里山自然学校では当初、里山メイト向けのさまざまな活動が企画されていたが、全般的に老若男女すべてを対象とした企画のため、継続的に参加するには少し物足りないものであった。そんなときに、自然学校が里山メイトからの企画を募集したので、竹林の現状をみて心を痛めていたところであったので、家内と二人で、竹藪から管理された竹林へそして竹の子園への構想を応募した。

角間にはいくつかの竹林があるが、このうち私が「はしがみ竹林」名付けた場所には蝶

の食草として重要なムラサキケマンが生育しているので、これを除いて再生プランをつくった。同じ竹林でも、場所によって生えている植物が違い、また地形も違っている。たとえば「いけのはた竹林」では、竹は全伐するが3区画に分け、ひとつは樹を育てる場所、ひとつは草花を育てる場所(これはメダケが生えていることがわかったので今はメダケを育てる場所とした)、もう一つは竹炭づくりの体験のための竹の切り出しの場所とすることにした。ここでは、現在はタラノキがたくさん生えてきている。

午前中観察をおこなっていただいたのは、「おかだこ竹林」というが、これはもともと農家がつけたニックネームである。ここでは竹林の整備中である。現在17名の会員でおこなっている。イオン財団に申請して、助成金をいただくことができた。現在、竹炭窯の製作をおこなっている。

< 過疎化が進む山麓の事例

～鳥獣害対策の最前線からの報告～

中田彩子 氏 (白山市鳥獣害防止対策専門員)
「山麓の里山の荒廃と野生動物被害の現状」

鳥獣害専門委員というと、日常動物と関わっている仕事と思われるが、私は地域住民に鳥獣害対策を指導する仕事をしている。兵庫県の神戸の出身で、外部の人間の目からみえてくる白山麓の現状について報告する。

白山麓はサルの被害のイメージがあるが、現在はイノシシも入ってきて、田んぼに被害を与えている。田んぼにイノシシが入ると、イネににおいがつくので、田んぼ一枚分がダメになる。またイノシシは畦を掘り返す。

サルの場合は、集団でやってきて一度に大きな被害を起こす。作物の少しずつ大量に囓るため、心理的被害も大きい。

白山麓では、おもにおばあちゃんたちが作物を作っている。なぜ、イノシシやサルやハクビシンその他に囲まれて、おばあちゃんたちはなぜ作物を作るのかというと、それが文化であり、つくる喜びがあるからであり、収



写真：竹ん子クラブの活動の場。竹藪から竹林へ。刈られた竹が林内に積まれている。

.....

穫が楽しいからである。また、子や孫に食べさせたいという思いからつくっている。そうした思いが一瞬で失われるので、ショックで寝込んだり、体調を崩す人もいる。

白山麓での鳥獣害対策としては、柵を作るのが一般的であるが、10m四方を囲うのに5-6万円もかかる。その他、発信器をつけて行動を把握したり、生息数を推定したりという取り組みもしている。

白山麓でサルが増えた要因としては、温暖化により冬期の死亡率が下がった、餌付け等でサルが人を怖がらなくなった、過疎化・高齢化で里山が荒れ、人里にサルが侵入しやすくなった等が挙げられる。

白山麓で里山荒廃を食い止められるだけのマンパワーがなく、今後さらに荒廃が進むことが予想される。都市近郊の里山とは異なる厳しい状況がある。

<水郷の自然再生の取り組み～多様な団体の協働と市民参加の実践事例>

今井敏彦 氏（河北潟自然再生協議会代表）

「住民の視点から見た河北潟の水位管理の問題」

河北潟自然再生協議会は平成14年から立ち上げ、さまざまな団体20あまりが参加して活動をおこなっている。私は地域住民として、河北潟の水位管理について日頃から切実な問題であると感じている。

現在の河北潟の水位は、日本海よりも40cm高く設定されており、干拓地や周辺の一部の河川の水位よりも高くなっている。この水位を保つために、日本海と繋がる大野川には、防潮水門を設置して、また周辺の低い河川の間には樋門を設置している。通常は自然流下では、潟へ周辺の水が流れないために、河北潟には、洪水防止のために多くの排水ポンプが配置されている。降雨時には、このポンプが起動することによって、周辺の民家や水田の湛水を防止している。したがって、ポンプが起動していないときには、川の水が流れず溜まった状態になり、夏場などは水質が悪く

なり悪臭が漂うこともある。

水田は通常、民家より低い場所にあり、いざというときに民家への洪水を防ぐために機能してきたが、近年では、河北潟の周辺の圃場整備が進み、乾田化のために圃場が嵩上げされ、ほとんどの田んぼは、現在では道路や民家より高い位置にある。私の住む金沢市木越地区では、水田の水害防除機能を重視して、嵩上げを伴う圃場整備はおこなっていない。これまで行政より、何度か圃場整備の要請があったが、平成10年に河北潟周辺で水害が起きてからは対応が変わってきた。

河川の悪臭の問題は毎年起こっており、また日本海の水面は最近高めの時が多く、河北潟への海水の侵入を防ぐために、水位が+40cmでなく、実際には+60cmくらいになることもある。そのため、湖岸のヨシ群落の衰退も指摘されている。周辺の生活を守り、潟の水をきれいにすること、そして水辺の自然を守ることが潟住民の願いである。そのためには潟の水位管理の問題は避けて通れない。これまでは行政への窓口がなく、なかなか声を伝えることができなかったが、住民側の窓口ができたことで今後、住民の声が通りやすくなっていくことが期待される。また、住民のたくさんの声を集められるようにして、そのパワーで、行政へ声を通るようにしていきたい。



写真：集落より水田が高い位置にある。河北潟の広い範囲でこのような問題がおきている。

高橋 久 氏（河北潟自然再生協議会事務局長・
河北潟湖沼研究所理事）

「河北潟で自然再生に取り組む多様な主体の 紹介と実践事例」

河北潟は、汽水湖から干拓事業により、干拓地と淡水湖になった湖である。干拓前には、湖岸には舟小屋が建ち並び、潟漁がおこなわれ、住民は、河北潟でとれた魚介類を食べていた。湖岸線は複雑で典型的な水郷の様相を呈していたが、干拓事業に伴う周辺の湛水防除事業により、湖岸にはほぼ100%堤防が築かれ、単調な湖岸線となった。これにより、河北潟の水辺の自然の多様性は低下したものと思われる。一方で、危険な水辺が増えた。

潟の自然が亡くなったのと同時に、潟と住民の接点が失われた。また、昔の水郷の面影もほとんど消失している。河北潟の自然再生と同時に潟と住民との接点を取り戻すことが、重要になってきている。

河北潟の水辺を再生するためには、公共事業による方法、自然の回復力に任せる方法、住民による自然再生ということが考えられる。公共事業は形状の変更を伴う大規模な事業が可能であり、自然再生に有効であると思われるが、形状の変更（土木工事）のみをおこなった場合には、予測どおりの自然が再生しない場合も多い。河北潟における自然再生には、継続的なきめの細かい管理が必要であり、河北潟のことをよく知っている地域住民の参加が不可欠である。

河北潟湖沼研究所は、昨年、手作業による湖岸の外来種の除去をおこなったが、希少な水草を残しながらの除去をおこなうことができた。河北潟自然再生協議会の主催する河北潟クリーン作戦には800名の参加者があった。その他、さまざまな団体が関わって河北潟の自然再生が始まっている。



シンポジウムを終えて思うこと

今回のシンポジウムでは、「住民が守る地域の自然」というタイトルのもと、

- ・市街地化しつつある里山である角間からは、ボランティアの住民から、里山活用の事例を、
- ・奥山化しつつある里山である白山麓からは、鳥獣害対策を住民に指導する専門員から、その現状を、
- ・水郷からは、NPOの方から、自然再生の取り組みを、それぞれ報告していただいた。

地域の住民が、自分達の住む地域に、問題意識を持ち、働きかけ、続けている。

自然を守る上で、この地域住民の働きかけというのは、たとえ活動に取り組んでいる場所や取り組み主体、それに伴う目的や方法が違ってても、必要不可欠なものだろう。

皆、身近にあるこの自然を何とかしたい！！という思いから、それぞれの活動をしている。けれど、一筋縄ではいかない問題ばかりで、解決の糸口は見えにくい。

今回のシンポジウムの副題には、「個人・団体間の情報交換と交流」とある。共に「地域の自然を守りたい」と思う者同士、どのような連携ができるのだろうか？

核となるのは、情報の共有と、役割分担（人のつながり）であると思う。地域住民を主体とした取り組みは不可欠だが、それだけでは解決しない問題もある。代表的なのは、中田さんが報告して下さった白山麓での里山荒廃である。「マンパワーがない。」そこに住む人達だけでは解決できない。地域住民だからできること、行政だからできること、外部の人間だからできることがある。

シンポジウムを終えてみても、問題解決のためには、どうしたらいいのかはよく分からなかった。だが、地道に活動を続けられている、その姿勢が、私の背中を押した。

（事務局 深澤 愛）





今年の3月と9月に、インドネシアのカリマンタン島（ボルネオ島はマレーシアでの名称）の低湿地帯の調査にでかける機会を得ました（写真1）。調査対象となる湿地帯は南緯2度にあり、まさに赤道直下の熱帯域に広がる湿地帯です。調査の主な目的は、湿地帯に広がる浮漂植物群落の構造とそれに住みつく動物を明らかにすることです。



写真1：低湿地帯周辺に広がる水域。海岸から200kmも内陸に遡った地点でも標高はわずか17mほどしかなく、乾期には細い流れであった河川も雨期には広大な氾濫原を形成するため、周囲は水浸しになる。

浮漂植物とは水面に浮かびながら生長を続ける水草であり、インドネシア各地の水辺では、日本の熱帯魚屋や園芸店でもおなじみのホテイアオイ(*Eichhornia crassipes*)、オオサンショウモ(*Salvinia molesta*)やボタンウキクサ(*Pistia stratiotes*)という浮漂植物たちが繁茂しています（写真2）。

熱帯の低湿地の特徴の一つに、その水がまるでコーヒーか紅茶のような黒褐色に着色していること（ブラックウォーター）があげられます（写真3）。

この色の正体は、周辺の森林で作られた大量の有機物が分解しきれず流れ込んだものです。これに伴って湿地帯の水は酸性に傾き、酸素もひどく不足した状態になります。ブラックウォーターの中では、湖底に沈んだまま生長を続ける沈水植物をほとんど見かけることができません。おそらく、水中の光量不足や酸性の水質がそれらの生育を拒んでいる



写真2：オオサンショウモ(*Salvinia molesta*)。日本やアジア原産のサンショウモ(*Salvinia natans*)にくらべると葉も根も格段に大きく、水面を埋め尽くす勢いで成長する。



写真3：ブラックウォーター。ペットボトルの水は、背景の小湿地の水を汲んだもの。褐色に着色しているのがわかる。

ものと思われます。また、ここでは雨期と乾期の水位差が3-4mほどもあるため、日本の水辺にはえるヨシなどのような抽水植物もあまり広がることができません。ブラックウォーターの広がる熱帯の低湿地は、本来、水草にとってあまり良好な生育環境ではなさそうです。

しかし、このブラックウォーターの中でもホテイアオイやオオサンショウモは割と平気な顔をして暮らしています。それもそのはず、彼らの本来の生育地は雨期と乾期の水位

差が大きく、またこうしたブラックウォーターの広がる南米アマゾンの湿地帯であり、いわば故郷に似た水環境でも生育出来るのは何も不思議なことではないのかも知れません。

水中に生育する水草は、池や湖沼の動物（主に昆虫や稚魚など）にとって、もっとも重要な生育場所を提供していることはよく知られています。餌の供給場所として、捕食者からの避難場所として、また生涯のすみかとして様々な動物たちが水草を利用しています。日本をはじめとする温帯域では、そうした役割を沈水植物や抽水植物などの葉や茎が担っています。しかし、ここカリマンタンの低湿地では、それらに代わって浮漂植物の、そのカーテンのように水中に垂れ下がる根が同じ役割を果たしているようです(写真4)。



写真4：ホテイアオイの水中根。こうした根は植物体全体の約半分の(乾燥)重量を占める。

同行者による調査によれば、これらの根から採集された主な動物種として、エビ類やトンボ科幼虫など、日本でもおなじみの水生動物に始まり、魚類を含めると40分類群におよぶ多種多様な動物が採集されています(上西ほか、2006)。

調査を続けるうちに、さらに興味深い事実も明らかになってきました。酸性でかつ酸素に乏しいブラックウォーターの中で、この根のカーテンの周囲だけは酸性度が緩和され、酸素濃度も高くなっているのです(永坂ほか、2006)。ヨシやガマなどの抽水植物の根が

酸素を放出し、周りの底泥環境を変えていることはよく知られています。本来動物の乏しいブラックウォーターにおいて多種多様な動物が保持されている理由の一つに、どうやらこの根の環境緩和の働きが関わっているようです。

ホテイアオイやオオサンショウモは南米原産、ポタンウキクサは南アフリカ原産であり、カリマンタンの自然にとって本来は招かれざる外来種です。日本の場合でも、ホテイアオイやポタンウキクサは、暖かい地方の水路や池をしばしば埋め尽くす害草であり、2000年前後には河北潟の西部承水路でもホテイアオイの大繁殖によって、アサザやトチカガミといった希少種の生育場所が奪われるなど大きな問題となりました。おそらくカリマンタンでも同じような生育環境を好む水草、例えば現地の在来種であるサンショウモ(*Salvinia natans*)の生育などには少なからぬ影響があったらと推測出来ます。また、これらの浮漂植物の定着以前のカリマンタンの低湿地の動物相は、今とは異なったものだった可能性もあり、そうした意味ではこれらの外来植物の定着は、本来の自然を大きく変えてしまったのかもしれない。

カリマンタンの低湿地帯に暮らす人々にとり、湿地から得られる魚類は今も主要なタンパク源であり、その魚類生産を支えている側面に着目すれば、これら外来種の定着が果たした役割は非常に大きいものと言えます。インドネシアの水域にホテイアオイが繁殖し始めてから既に百年以上が経過していますが、ようやくその新たに出現した(認識された)ビオトープの全容解明が始まったところです。今後、何が違って、何が変わらなかったのかを一つずつ明らかにしてゆこうと考えています。

*) このインドネシアでの調査は拠点大学交流事業「東南アジア湿地生態系における環境保全と地域利用」(北海道大学)により遂行されています。関係各位に深く御礼申し上げます。

「白山麓で1日かけて見る人数を、都会では1秒で見ることができるなぁ」

5年前白山麓に来た当初、私はよくこう思いました。関西の工業地帯で生まれ育ち、学生時代も東京などの都市部で過ごした私にはそれがとても印象的でした。

その代わりに、白山麓では都会で見ることの出来ないものを沢山見ることが出来ます。その1つが野生動物。山の中へ分け入ってわざわざ見に行かなくても、野生動物の方から集落へ出てきてくれます。と、何だかのどかな風に聞こえますが、このことはとても大きな問題なのです。田畑へ遊びに来るだけなら



よいのですが、田畑にある農作物を食べてしまうのです。(写真：ニンジン被害。サルに食べ散らかされた跡。)

これは鳥獣害と呼ばれています。全国の被害金額は年間約200億円に達します(農林水産省調べ)。白山麓では1980年頃からサルによる農作物被害が発生しています。そして4~5年前からはイノシシ被害も発生するようになりました。近年は被害発生地域の拡大、被害の激化が目立っています。

では、被害に遭う人達はどんな人達でしょうか。

それは"おばあちゃん、おじいちゃん"。ほとんどが高齢者の方です。白山麓は畑作の農業地帯ではありません。山麓で作っている野菜は9割以上が自家消費用です。自分が食べるため、子や孫にあげるため、近所の人へあげるために作っています。農作業は山の人の文化であり、生き甲斐でもあります。丹精こめて作った作物を動物に食べられたおばあちゃんやおじいちゃんはとても悲しみます。

しかし、食べられてばかりいるわけではありません。対策を行っています。多くの方は柵を設置しています。(写真：柵群)。あと、動物が田畑などに出てきているのを見ると花火や石で追い払ったりもします。私の仕事はそれらのお手伝いをすることです。個人によって異なりますが、設置する柵の高さはだいたい人の背丈以上あります。ネットは天井まで張ります。とても大変な労働です。特に高齢者にはきつい労働です。頑丈な柵を作ろうとすればする

ほど労働もきつくなります。そんな大変な思いをして設置する柵ですが、それでも入られて作物を食べられることも少なくありません。



これらの対策以外には、一般的に次のようなことが必要だと言われています。野生動物を人里に寄せ付けないためにカキやクリの実を除去すること、野生動物の隠れ場所をなくすために里山整備や耕作放棄地の草刈りなどの環境整備を行うことです。

しかし、考えてみてください。白山麓にある広大な里山や耕作放棄地を整備するだけの労力が白山麓にあるでしょうか…?!

難しいのが現実です。

過疎化、高齢化で野生動物に対抗する人の力が弱まっています。地域の活力が衰退しています。地域の活力の衰退はこのように鳥獣害対策をうまく進められないだけでなく、他にも影響が沢山あります。その1つに文化の衰退があると私は思います。地域のおばあちゃんやおじいちゃんの話しを聞いていると、白山麓には野生動物や自然を利用して共に生きる知恵(=文化)が沢山あることが分かります。しかし、地域の衰退と共にそのような文化も衰退していつてしまっています。そのような文化にスポットが当てられ、活力が戻るとすれば…。もしかしたら鳥獣害対策もうまくすすんでいくかもしれない…と私は思っています。

活力を戻すことは非常に困難なことです。自分なりに何かできることはないかと考えています。地域活性化の取り組みを行っていく中で鳥獣害対策も進んでいくのが理想的な姿の1つではないかと私は考えています。

ブログ「遊悠畑」

<http://yuyubatake.way-nifty.com/blog/>

白山麓の鳥獣害対策のことなどを書いています(個人的なことも沢山書いていますが(^_^;))

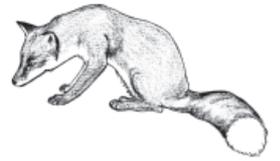
ゆうゆう畑ショップ

<http://yuyubatake.sakura.ne.jp/>

白山麓の食べ物や伝統工芸品を扱っています



交流会メンバーの自己紹介コーナー



私とビオトープ

前川繁代

はじめまして、今回、自己紹介を兼ねた一言を書かせていただくことになりました。

ビオトープという言葉を知るとなぜか、水のある場所、池、湿地帯などを連想しますが、今はそれらを再生させるために使われる言葉のように思います。

私事ですが、森本から福光街道に入ってしばらくすぎた所の不動寺町で幼少期を過ごしました。家の後ろには、倶利伽羅峠方面まで行ける小高い山があり、前には支流の他に、数枚の田んぼを超えれば水の豊かな森下川がありました。その辺すべてが遊び場所でした。大人たちが働いている間、幼稚園や学校から帰った子供たちは、その自然をふんだんに利用させてもらい、日の暮れるまで、殆ど外で遊びました。たにしがいっぱいいる、れんげの生えた田んぼの中で“れんげそー、れんげそー”と手を繋いで歌いながら遊び、稲が干してある、はさの空いている所で鉄棒もどきのことをしたり、田んぼの脇の小川で魚つかみなどをしました。

裏山では蛇のひげの紫の実を近所の竹細工の名人に作ってもらった竹鉄砲で飛ばして遊びました。杉などの枯れ枝も、山道に沢山落ちていたので、祖父と薪狩に行き、風呂炊き等に使いました。名人には竹おじゃみもよく作ってもらいました。

夏には男の子はパンツだけ、女の子は白い綿のシュミーズ（今でいうスリッパ、その頃はそんな名前だった）にパンツの格好で川に入り、小規模なダムのようにせき止められた中



で、泳いだり、潜ったりしました。又、ダムのように傾斜したコンクリートのヌメヌメの藻類が生えた場所で、ごりが、薄く流れる水といっしょに渡ろうとしているのを、捕まえて邪魔したりしました。あのヌメヌメの感じが今も手に残っています。

昔は三谷村と言われていたようにそれぞれの村が山に囲まれていたのですが、森下川はその間をぬうように流れていたため、川の遊べるような箇所は、いくつかの村の子供たちのコミュニケーションの場にもなっていたように思います

このような状況もいつしか変わり始め、家のすぐ前の支流ではコンクリートの護岸工事が始まりました。その時、私は家の前の空き地に一平方メートルほど囲いをし、池の水を通して、近くの田んぼの水路に余っているように置いてあった苗を植え、自分の田んぼとして観察し、日記を付けていました。稲は順調に生育し、もうすぐ穂が色を付けるところだったので、ある日学校から帰ると、工事のため稲は引っこ抜かれ、むなしくも私の小さな田んぼは壊されてしまったのです。今思えば、私にとって、ビオトープのつもりだったのかもしれませんが。

こうして回顧しているだけであの頃の空の色、辺りの匂いなど、五感に残るものが次々と蘇り、とても幸せな時間になりました。感謝しております。

可能ならば、子供たちの五感に心地よく残る自然を保ち続けてほしいものです。



第6回いしかわビオトープ交流会総会が、6月3日(日)に金沢大学創立五〇周年記念館「角間の里」においておこなわれ、以下の活動報告と活動計画案が採択されました。役員改選もおこなわれ、2005年度の役員全員が再選されました。予算決算についての採択もおこなわれました。

[2005年度活動報告]

会員数

2005年度は、2名の新規会員を迎えたが、賛助会員2団体の退会もあり、昨年と同じ69名(うち団体会員2名)となっている。また、会費の未納者も若干名存在している。

活動

2005年度の活動としては、まず、ニュースレター「身近な自然」を2回(No.9-10)発行したことが挙げられる。各号500部ずつ作成し、会員に配布したほか、県民エコステーションやこなん水辺公園、玉川図書館など県内のいくつかの施設に配布している。

第9号では石川県両生爬虫類研究会の宮崎光二氏に里地のクロサンショウウオとホクリクサンショウウオの現状について、詳しくご紹介いただいた。その他第5回総会記念シンポジウム「自然環境教育とビオトープ」の抄録等を掲載した。第10号では、金沢市犀川でおこなったビオトープ観察会の様子や河北潟でおこなわれている住民等による水辺の保全再生活動について紹介した。

ビオトープ観察会は総会と並行して実施した小松市憩いの森の観察会の他には、9月に犀川でおこなった観察会の1回のみであった。

昨年立ち上げた当会のホームページのアクセス数は約22,000となっており、約1年間で5千人が閲覧したことになる(重複を含む)。しかし、前年の1万人よりは減っている。インターネット上のホームページ数の急激な増加(ブログを含む)や、最近のインターネットの閲覧者の傾向の変化もあるものと思われるが、紙面の更新が滞りがち

なのが、閲覧者の減少につながっている主な要因であると考えられる。

成果と問題点

ブームとしての「ビオトープづくり」がほぼ落ち着き、学校ビオトープなどの活動の停滞のややみられる中で、「いしかわビオトープ交流会」が長期的には会員数を拡大し、現在も活動を続けていることは、評価に値する。同時に、最近の活動の活性の低下や化会員数の横ばいについては、問題点を十分に解析する必要がある。

もともと「いしかわビオトープ交流会」は、「ビオトープ」を人工自然の造成やミティゲーションの手段としてのみ捉えるのではなく、ニュースレターの表題にあるように「身近な自然」を守り育てる活動として取り組んできた。今日、こうした本来の意味での「ビオトープ」概念の浸透がみられ、また「身近な自然」への保全や再生のため、地域に根ざし継続的に自然と関わっていく個人・団体としての活動の進展がみられるようになり、それぞれの活動の中核となって活動しているいしかわビオトープ交流会の会員も存在する。「いしかわビオトープ交流会」の掲げてきた活動方針が、いよいよ重要となってきている。今後、「身近な自然」との関わりに注目した活動へさらに注目して、「いしかわビオトープ交流会」の活動を展開していくことが求められる。

そのために、現在の活動の問題点を具体的に明らかにしておくことが肝要である。前年度から指摘されてきたことであるが、会員が参加できる活動の停滞がみられた。観察会の開催自体が十分にできない状況が見られた。事務局を1名増やして望んだが、体制を活かして活動することができなかった。会員間の直接交流の弱さは前回の総会でも取り上げたが、情報交換、相互交流の機会をほとんどつくることはできなかった。会員が見て役に立つホームページの工夫がおこなわれなかった。おもに事務局の体制がまだまだ脆弱であることに原因があるが、

脆弱なことを理由に活動の停滞を許容している面も見られた。年度初めに年間方針の具体化が不十分であったことも、活動の停滞につながった。

2004年活動方針で確認されているパンフレット「身近な自然 - 能登編」の作成については、ファンドの獲得や実施体制を含め、活動の見通しはまだ立っていない状況である。

〔2006年度活動計画〕

2005年度の活動方針としては、基本的にはこれまで続けてきた取り組みを継続することとするが、活動計画をより具体的とすることにより、確実に活動をおこなうこととする。

1) ニュースレターの3回の作成

- ・第11号を7月に発行する。第12号を11月に発行する。第13号を2007年3月に発行する。内容の一部企画化を図る。
- ・配布先についてさらに検討する。また、これまでに発行された分を含めて図書館や全国の関連機関への寄贈を検討する。

2) ホームページの活用

- ・新しいニュースの更新がほとんどおこなわれていないので、できるだけ新しい情報を頻りに掲載するように努力する。会員各氏からもニュースの寄稿いただけるよう働きかける。ホームページ上での交流形態について研究する。

3) ビオトープ観察会の4回の開催

- ・2005年度に十分に活動が出来なかった反省の上に立って、2006年度は、あらかじめ年間計画を明確にして、活動に取り組む。そのため、ビオトープ観察会をシリーズ化してテーマを持たせ、年4回程度実施する。併せて、総会も観察会との統一性を持たせる。
- ・2006年のテーマは「保全活動がおこなわれている身近な水辺」とする。(以下省略、個別計画)

4) 総会シンポジウム

- ・テーマ「住民が守る地域の自然」～個人・団体間の情報交換と交流～

5) パンフレット作成活動

- ・助成金へ応募し、条件が整えば、「身近な自然」能登地区編を作成する。

6) 会員間の交流の推進

- ・ニュースレターの投稿記事を増やすなどの取り組みを通じて、会員間の意見交換が進むようにするように努力する。会員の直接交流を重視し、気軽に会員同士がふれあえる場を設定するよう努力する。会員同士が協力して取り組めるビオトープづくりの場や共通の自然観察のフィールドを持てるような条件づくりに取り組む。

7) 会員と賛助会員の拡大

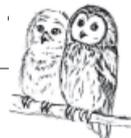
- ・当面70人を目標に会員を拡大するために努力する。また、企業を中心に賛助会員を獲得するよう努力する。
- ・現在、ニュースレターは無料となっており、会員以外でも手に入れることが可能である。会員であることの特典は、会紙の配布を受けることの他に、さまざまな情報提供を受けることや、交流の機会を得やすいといったことであり、今後、会員限定の情報提供の手段を検討するなど、会員がさらに特典を得られるような工夫をする。

8) 諸活動を支える事務局体制の強化

- ・当面、総会での新たな事務局員の補充は考えないが、事務局の裁量により事務局活動をお手伝いいただける会員を募り、2006年度の活動をおこなっていく。根本的な体制の強化については、時間をかけて準備していく。



..... お 知 ら せ



2006 年度第 1 回観察会の記録

5 月 13 日に、志賀町の湧水地帯の現状と、トミヨの生息地保全活動の場を見学・観察しました。同町末吉にある鷺池は、湧出量の豊富な水質の良い池で県内では数少なくなったトミヨの生息地です。ここでは県、町、大学、土地改良区、地域住民、小学校が一体となって、トミヨの生息環境の保全・改善にむけた取り組みがなされており、その取り組みのとりまとめをおこなっている、当会事務局の草光紀子さんに、生息地の現状とその取り組みを解説いただきました。その後、徳本洋さんの案内で、近くのイカリモンハンミョウが生息する海岸に行き、現状について説明いただき、巣穴がありそうな場所などを海岸を歩いて探しました。参加者は 7 名と少なめでしたが、内容の濃い観察会となりました。



2006 年度第 2 回観察会の記録

6 月 3 日 (土) 10:00 ~ 12:00 に金沢大学角間キャンパス内の里山再生の取り組みを観察しました。金沢大学里山自然学校の里山メイトの方々による北谷の棚田復元活動や、オカタコの竹林整備の様子を観察しました。竹林の管理が以下に持続的な努力が必要なものなのかを実感しました。参加者は 13 名でした。(関連記事 2 面)



伝言板コーナー

会員の皆様からの情報や、行事などをご紹介していきたいと思ひます。ぜひ事務局まで情報をお寄せください!

2006年度第4回観察会のお知らせ

第 4 回観察会は、河北潟の自然再生の取り組みを視察します。現在、河北潟に流れ込む舟入川(昔の舟通し水路)のひとつである馬渡川で、外来種の水草の除去の実践を体験します。その他に、住民によるヤナギ植栽の現場等を観察します。

日 時 2006 年 11 月 25 日 (土) 9:00 ~ 12:00

集合場所 こなん水辺公園(金沢市東蚊爪)

注意事項 馬渡川の活動は、NPO 法人河北潟湖沼研究所が主催して当日実施しているものですが、いしかわビオトープ交流会としては短時間だけ、この活動を視察・参加します。水草除去の体験を希望する方は、長靴、ゴム手袋、合羽等をご用意下さい。泥だらけになります。臭いは風呂に入るまで取れません。



..... 「身近な自然」 No.11 秋号

2006 年 11 月 14 日

発行所 いしかわビオトープ交流会

Email: biotop@yupapa.net

http://biotop.yupapa.net

事務局: 〒920-0051 金沢市二口町八 58

Tel. 076-265-3323 / Fax. 076-265-3435

北陸水生生物研究センター 気付



.....